発表 No.実３　　**実践発表**

CLD 児の学習意欲を高める絵本等の多読プロジェクト
―沼津市立開北小学校・第一小学校・沢田小学校 Umi（国際室）の実践事例―

生田佳澄　（静岡県沼津市立開北小学校）

１．はじめに

本市は、「特別の教育課程」を受けている児童数が県東部地域において最も多く、外国につながりをもつ児童生徒の在籍率は 87%、小学校では 100%である。外国につながりをもつ児童生徒の散在地域で市内に国際室のセンター校はない。Umi とは、自分が勤務している３校と昨年度兼務した１校で新設した国際室の名称である。子供のもつ可能性は、海のように深くて広いことから海組と名付け、来日間もない子供にも保護者にも判別しやすいように Umi と表記した。３校の管理職との協議により、各学校の Umi（国際室）をグランドデザイン内に位置づけ「誰一人取り残すことのない教育」の理念のもと Umi で「特別の教育課程」を実施している。「絵本等多読プロジェクト」を Umi の年間計画に取り入れ、各学校や学年の読書活動と関連付けながら２年間継続実施している。Umi は、学級や全校に向けて発信する活動の拠点にもなっている。

２．目的

カミンズ（2011）の CLD（Culturally and Linguistically Diverse Students）とは、中島訳の「文化的・言語的に多様な背景の子どもの総称である。」との捉えのもと本稿における対象児を CLD 児と表記する。本実践の目的は、CLD 児の学習意欲を高め可能性を拓くことにある。

３．絵本等の多読プログラムの実践

前述の目的のため絵本等の多読に注目し、年間計画に取り入れ継続的に実践した。

3.1 絵本等の多読に注目した３つの理由

①　概念形成期の CLD 児にとって学習言語もイメージと共に印象深く出会えるため。
②　誰もが知る絵本を級友だけでなく学年や世代を超え共に語り合うことができるため。
③　水の循環や地球温暖化等の今日的な問題についても段階的に知ることができるため。

3.2　絵本等とは

やさしい日本語で書かれたスライドコンテンツや、動画コンテンツ（NHK for School の動画コンテンツや NHK　News Web Easy）。道徳科や「言語科（読解・英語科）」、総合学習に関連したリライト教材。CLD 児が自発的に母語や英語、日本語で検索して得た教科学習等に関連した情報、翻訳機能を使い内容理解をした文章も含める。

3.3　実践方法

①　自分の強みを生かす
（１）来日間もない CLD 児が母語版絵本等を読む・読み聞かせした。（Umi や在籍学級で）
（２）個人記録は、学年で使用する「読書の記録」を使用した。記録は CLD 児の強みになる。
②　内容理解を重視し、負担を減らす
（１）実態に応じ必読図書を Umi 必読図書（絵本等）で補うことを職員会議で検討した。

（２）Umi のみんなで何冊読んだのかを掲示物で継続的に記録した。次々に目標を達成した。
（３）読み聞かせした絵本も、読み聞かせしてもらった絵本も１冊にカウントした。
③　段階的な言葉学習
（１）読み終わったら好きな場面やページを振り返り対話、絵で表現、あらすじ再生。母語可。
（２）母語を使って書いたときには、母語支援者や ALT が来室したときにその絵本についてのブックトークをする際、ネイティブチェックを入れた。
（３）高学年の児童の学びをできるだけ母語や継承語を使って下級生に分かりやすく伝えた。Show and Tell で CLD 児による CLD 児に向けたリライトでの語りを重視。
（４）意図的な選書（一人でも読んで意味が分かる絵本、教科書の原書や母語版，教科書の内容に関連した写真絵本、原爆、水の循環等、動画コンテンツは、URL を共有した。）

4. 成果と課題

成果について述べる。一人１年間で約５0~1２0 冊読んだ記録をもとに Umi の児童全員が昨年度も今年度も多読賞を学級で受賞できた。週３回対象児童 15 名の A 校では昨年度みんなで約 200 冊今年度約 500 冊、合計約 700 冊読んだ。週１回途中から対象児童１名の B 校では、100 冊読破し 50 冊分のあらすじ再生をノート１冊に書いた。週１回６名の C 校では本年度みんなで 200 冊（昨年度はみんなで 100 冊）。昨年度週１回３名の D 校では、みんなで 50 冊読み聞かせ。（D 校では言語発達上難しさのある対象児３名に母語と日本語で読み聞かせを実施。１名には自作リライト教材をミニ絵本にしたところ、初めて自力で最後まで絵本が読めたと喜んだ。そこから、絵本に手が伸びるようになった。）本年度 ABC 校の Umi では、多読記録掲示に関心を示し、友達が読んだ本を探して読んでみようとする姿や自ら知りたい情報を検索し翻訳機能を使い内容理解する姿が見られた。互いに読み聞かせし合う姿も日常的に見られるようになった。A 校では高学年の伝え方を参考に低学年の CLD 児たちがアイデアを出し合い在籍学級で日本語と母語で読み聞かせをした。継承語や母語でも読み、聴き、話し、書いてみる体験を重ねた本年度２学期に、家庭内での会話が増えたとの保護者の声や、親の話す言葉が分かるようになってきたという CLD 児の声が担任から届くようになった。また、先行学習で教科書の教材の原書や関連する絵本を多読プロジェクトで扱ったところ、話の大体の内容が分かり在籍学級の授業で積極的に発言するようになったと担任や専科の教員からの感想があった。母語でない英語も日本語も母語や継承語も互いにつなげながら頭の中で考えることが増えてきたらしい。また、学校全体に向けた Umi 企画も図書・放送委員会の児童と協働実現している。６年生は、将来の夢を職業からだけでなく自他の強みを深く考え可能性を探る発言が増えた。級友や担任，校内職員が CLD 児の強みに気付くことで温かな学校文化が芽吹き始めている。CLD 児の学習意欲の高まった事例共有により絵本の多読の良さに注目するようになり全校月１回親子読書の日には、絵本の読み聞かせも指導部が推奨するようになった。特別の教育課程における支援方法も全体研修で共有した。今後、CLD 児とともに学ぶ全ての子供たちの国際感覚（多文化・多言語共生）の萌芽を大切に育み豊かにしていくことが課題である。CLD 児と共に学ぶ強みを生かし多言語・多文化共生社会の担い手となる人材を育成する教育を持続可能な方法で更に協働実践する所存である。

【引用文献】

JimCummins ・中島和子著訳（2011）『言語マイノリティーを支える教育』明石書店 pp.15
中島和子(2022)『完全改訂版　バイリンガル教育の方法』アルク、pp. 56